

世界
文學辭典

文 學 辭 典

走 走 雄 清 藏
一 好 富 健 集
匹 野 塚 西 島 編
渡 中 手 神 中

河 出 書 房

昭和二十五年六月二十五日 印刷
昭和二十五年六月三十日 發行
昭和二十六年四月三十日 四版發行

世界文學辭典
定價 四百八拾圓
地方賣價 四百九拾圓

編者代表 中野好夫

發行者 東京都千代田區神田小川町三ノ八 河出孝雄

印刷者 東京都品川區大井寺下町一四三〇番地 山口新吉

發行所 東京都千代田區神田小川町三ノ八 株式會社 河出書房

(會員記號 A-1101-14)
振替口座 東京一〇八〇二
電話 神田(25)三一七四

編者の言葉

この小さな書物は西洋文學を正しく理解するために必要とされる知識の大綱を辭典の形式で纏めようとする新しい試みから生れた。このような書物の有用性についていま改めて多くの言葉を費すことは無用であるが、ただ一言いうことを許されるならば、西洋の文學というものが一般にもつと系統的に理解され、たとえば個々の作家の作品を讀むにしても、全體の流れのうちにあるものとして正しく評價されることもつと強調されていいのではないかと思う。そしてそのためには、徒らに項目の羅列に了る從來のこの種の書物の形式を捨てて、文學の主流を辿つて重點的に項目を選び一項目の解説に相當の紙數を費しているこの辭典が有効に用いられることを信じている。

時間的なまた分量的な制約、その他已むを得ない事情から、この書物の構成には尙多くの不備な點があることと思う。このことは率直に認めなければならぬし、幸にその機會に恵まれるならば、他日の完璧を期したい。しかしこの書物にはそれらの缺點を補つて餘りある長所がある。それは、それぞれの項目が造詣の深い研究者によつて解説されていることで、従つて記述の正確さという點に於ては十分の

自信を以て讀者におくることができるのである。ここにそれらの多數の執筆者、就中この企てを佳として快く執筆を承諾された先輩の諸氏、また執筆のみならず項目の選定その他に協力を惜しまれなかつた諸氏に對して深い感謝の意を捧げたいと思う。

一九五〇年五月

會田 由	大久保和郎	國松孝二	佐藤正彰	辻 昶	原田義人	矢内原伊作
會津 伸	大澤 衛	藏原惟人	鹽谷 饒	辻 理	番匠谷英一	山下 肇
淺井眞男	大畑末吉	吳 茂一	柴田治三郎	手塚富雄	氷上英廣	山田 肇
朝吹三吉	大山定一	黒田辰男	島田謹二	寺田 透	土方敬太	山田 肇
阿部知二	岡澤秀虎	桑原武夫	朱牟田夏雄	土居寛之	平井啓之	大和資雄
生島遼一	小川亮作	高津春繁	神西 清	東郷正延	平井正穂	山内義雄
池田 薫	尾島庄太郎	小西茂也	杉 捷夫	德永康元	平岡 昇	山室 靜
井上究一郎	小場瀬卓三	小牧近江	杉浦明平	中島健藏	平田次三郎	山屋三郎
井上正藏	梶木隆一	小牧健夫	鈴木力衛	中島文雄	福田恆存	除村吉太郎
井上 滿	加藤周一	小松 清	關 泰祐	中野好夫	福原麟太郎	除村ヤエ
石田憲次	金子幸彦	小宮曠三	高木 卓	中村眞一郎	袋 一平	横田瑞穂
石山正三	金子幸彦	齋藤 勉	高橋義孝	中村 融	富士川英郎	吉田正巳
市原豐太	加納秀夫	齋藤 光	高橋安光	中村光夫	舟木重信	吉原武安
伊藤 整	上村清延	相良守峯	高安國世	中橋一夫	細入藤太郎	淀野隆三
飯島 正	川口 篤	櫻井成夫	竹山道雄	成瀬無極	堀 大司	米川正夫
伊吹武彦	河盛好藏	佐々木斐夫	辰野 隆	西川正身	本多秋五	和久利誓一
入江直祐	神田盾夫	佐々木 理	田中泰三	野上素一	松下和則	渡邊一夫
上田 勤	木村太郎	佐々木基一	田邊貞之助	野島正城	水野 亮	
植田虎雄	串田孫一	佐藤晃一	谷 耕平	萩原彌彦	宮崎嶺雄	
海老池俊治	工藤好美	佐藤輝夫		原 亨吉	森 有正	

凡例

A 本書の内容は次の通りである。

1. 古代より現代に至るヨーロッパ及びアメリカの各時代、各國別の文學史及び流派の概説
2. 基本的文學形態の概説
3. 主なる作家の傳記
4. 主なる著作の内容解説

B 項目の排列

1. 文學史、文學形態、作家の項目はこれを區別せず、すべて五十音順に排列し、太字體を以て示した。
2. 主なる著作の解説は、若干のものを除き、便宜上副項目として取扱ひそれぞれの作家の傳記の後に置き、括弧「」内にその表題を掲げた。

C 記述の方式——大體次の通りであるが、細目についてはかなりの程度に執筆者の自由を尊重した。

1. 文學史の項目では時代區分、主潮、主要作家、作品等を記載する。

凡例

2. 文學形態の項目では、具體的な事例によつてその歴史的發展を記述する。

3. 作家の傳記に於ては、その生涯、主なる勞作、傾向乃至文學史的地位を記述する。そして冒頭に姓名の原綴、生歿年、國籍等を明示する。

例 **ブルースト** マルセル Marcel Proust (一八七一一一九二二) フランスの長篇小説家。……

4. 著作の解説は内容の分析を主とし、必要に應じて成立の事情、文學史的意義等を述べる。尙初めに原名をイタリック體を以て示し、また制作乃至發表年代を明記する。

例 「チャタリー夫人の戀人」 *Lady Chatterley's Lover*, 1928.

5. 重要な項目の終りには外國語及び邦語による標準的な參考書、著作のすぐれた版本また邦譯等を擧げる。

6. 解説の文章中では已むを得ない場合を除き外國文字は用いないこととする。

D 外國語の讀み方、書き方

1. 人名その他外國語を表わすには原則としてその所屬の國語による讀み方によるが、別に慣用のもの、あるいは各國語によつて異なる書き方、讀み方のあるものは必ずしも統一はしない。なお、例えばロマン主義、ロマンティスム、ロマンティシズム等の如きはこれを強いて統一しない。

2. 片假名による外國語の發音の寫し方も、現在もつとも普通に行われていると考えられるものに従い、ある一定の方式によつて統一はしない。

3. ギリシア語の原綴は、ローマ字を以て示し、なおギリシア語を片假名を以て示す場合は普通の慣例に従つて長音を省いた。

4. ロシヤ文字もローマ字に轉寫して示した。大體英語風の發音に通じるが、例外は次の通りである。

c 「ツ」即ち ts

ś 英語の sh

č 「チ」即ち英語の ch

u 「ウ」

ë 「ヨー」

v 「ヴ」、清子音の前と語尾では f と發音する。

j 輕く「イ」ja, jo, ju はそれぞれ「ヤ」「ヨ」

y 幅の廣い「イ」フランス語の eu に近う。

「フ」

ž フランス語の j 即ち「ジャ」「ジュ」等

例

凡

索引については卷末の「索引備考」参照。

ア

アイスキュロス Aiskhylos (前五

二五—四五六) 古代ギリシアの大劇作家、アッティカ古悲劇の代表的作者の一人で彼に續くソポクレス、エウリピデスと併稱され、やや爛熟前の古拙状態を示すが迫力においてはしばしば後者らを凌駕する。彼はアッティカの一市で宗教的に重要なエレウシスの貴族に出で父はエウポリオン。少年時にアテナイ民主政權の樹立とペイシストラトス朝僭主の没落を驗し、つづいてアテナイの勢力がいよいよ擴張され多島海の覇權を握つたその上昇期に生涯を送つた。殊にペルシア戦役は彼にとつても極めて重要な意義を持ち、彼はマラトンの會戦に出陣しその戦捷記念のため作詩し、また『ペルシアの女』を作劇した。彼が自ら作つたといわれる碑銘にも自己がマラトンの勇者

であることを特に誇稱している。

彼の劇作は早く始められたと思われるが、最初の優勝は前四八四年に當り、生涯を通じて凡そ八十篇前後の悲劇を制作したと推定される。彼はまた再度シチリアの僭主ヒエロンの宮廷に遊び、ついに同地において客死したと傳えられる。晩年には幾分年少の競争者ソポクレスの人氣に壓されて不遇に傾きもしたが、逝去後アテナイの市會は彼の詩才を十分に認めてその作品の上演に對しては隨時舞唱隊を國費によつて與えることを決議した。彼がはじめて劇作家として登場した時代にはまだ設備や技法が甚しく未完成で、いまだ戯曲としての十分な發達を遂げていなかつた。即ち内容的よりもむしろ外部的な、上演形式の問題であつて、獨立した俳優や舞台装置やの有無である。それ故に彼の劇曲もその初期と末期とでは形式内容ともに甚しい相違を示し、舞唱隊から分れて出たばかりの應答者(ヒポクリテス)の段階から、ソポクレス時代の三人の俳優をもちいて十分な演技をしめし、背景や扮装、種々な設備の使用などに完きを期した

『オレスティア』のごときものに至つてゐる。

アッティカ古悲劇の上演形式たる「四部曲」形式 tetralogia 或いはサテュロス劇を除いて「三部曲」形式 trilogia は、彼の時代には十分に格守されていたらしく、傳存するその作品、または有職家の記載等も大體これに則つてゐる。彼の制作として現代に傳えられるのは合計七曲で次の如き題名による。即ち 一、『嘆願する者ら』二、『ペルシアの女ら』(前四七二上演) 三、『アバイに對う七人』(前四六七) 四、『縛られたるプロメテウス』(上演年代不詳、諸説あるも恐らく晩年か) 五、『オレスティア』三部曲即ち『アガメムノン』『灌奠する者ら』『エウメニデス』(慈悲ある女神らの意で復讐神エリニエスのこと、四五八上演)の七曲がこれである。

これらの中第一は傳説にあるダナオスの五十人の娘らを舞唱團にしつらえ、なお劇曲としては幼稚な段階を脱していない。第二は珍らしい現代劇でクセルクセスの敗北を扱い、ペルシア王の故宮における女らの悲嘆を對比的

に印象づける。アテナイの讚美のうちにも驕慢へ下される天罰を示唆する極めて迫力ある劇曲とされる。第三はかのオイディプス王傳説に取材した四部作の一つでその二子が味方を招いて互いに死闘する悲惨な運命を描き、アンティゴネを點出する。第四はテイタン・プロメテウス四部作の一、人類に火を與えてゼウスの怒りを買ひ山上に縛せられる折の彼を示し、構想の雄大を以て恐らく観客を瞠目せしめたであろう。『オレスティア』三部曲は恐らく彼の最大傑作とさるべきもので、殊に『アガメムノン』の迫力と詩人の深い洞察、運びの巧みさは實に古典的な高みに到達している。『エウメニデス』の恐ろしい異形の復讐神を舞唱團として舞台上せる大膽も彼ならでは容易に企及し難いところであろう。

彼の長所がこれら内容的な雄大豪宕また高邁な氣魄に、表現としては雄勁蒼古な詞句、また人目を驚かす舞台装置、偉大なる英雄らの表出によるが如く、その短所もまた喜劇作家アリストパネスが揶揄する如くに、大がかりに過ぎて誇張に陥り難解な辭句を濫發し

て民衆の理解を困難にし、あるいは冗漫に流れる弊も時にないではなかつた。しかしその深い運命觀、強い宗教的感銘、高揚された氣品において獨自成つた永久的な古典たる重味を示してゐる。

原典——U. von Wilamowitz-Möller (Weidemann, 1914). G. Murray (Oxford C.T. 1937). P. Mazon (Paris, Budé, 1949 佛譯とも)その他 Verrall, Tucker らの原典對註本もすぐれてゐる。(吳茂一)

アイソポス (イソップ) Aisopos, 英. Aesop 上代ギリシアの寓話作者。現代に至るまで最も通俗的な、殊に動物を多く主人公とした寓話の一聯の題名とされてゐる。しかしもとよりこれらのすべてが彼の手に成るものでも、むしろその創意によるものではなく、むしろ民俗説話の要素も多く、他國から移入せられたと考えられる寓話も若干あるが、これらは年代的にさまで古からず、大部分はギリシアまたはその文化圏内で創作されたものと推定される。しかしながらその性格上民間説話

として口傳され、書寫されたのはかなり後期に屬するであろう。動物寓話中最も古いものはギリシア文學ではヘシオドス(前七〇〇頃)の『仕事と日々』二〇二に出る『鷹と鶯』の物語、つづつアルキロス(前七世紀)の斷片に『鶯とその仔をとつた狐』の物語等が、その後もひろく引用せられ殊に前五世紀末にはアテナイで大いに流行したらしく、アリストパネスの劇にもしばしば現れ、共にソクラテスがこれに親しんだこともプラトンの書によつて明かである。アイソポスの人の生傳等については何等明確な記載が見られないが、古くは既にヘロドトス(前五世紀中葉)に寓話作者としてその名が現れ、前六世紀中葉の妓女ロドピスと同時代の人で共にサモス島人イアドモンの奴隸であつた旨が記されてゐる。その他ブラトンの弟子ヘラクレイデス、アリストパネスの古註、プルタルコス、スイダス等の記録から推察すると、アイソポスは前六世紀初頭頃トラキアまたはブリュギアに生れて、後奴隸に賣られてサモス島に至りイアドモンに仕え、解放され教育に従事し兒童

のため動物寓話などを語り聞かせたものとされよう。ヘロドトスその他にはまた彼がデルポイの神殿に使し土地の人と争つて遂に殺害された旨を傳えているが、かかる傳説がデルポイ地方にあつたものと考えられる。

前五世紀におけるアイソポス寓話の流行は延いて殆んどあらゆる種類の類似した寓話を彼の創作に歸するに至つた。元來前六世紀前後は所謂教訓詩の盛行期でソロン（彼は一傳ではアイソポスの友人とされている）、テオグニスら教訓詩人の輩出を見、従つて人間世界の出來事を動物界に移し、種々な處生智を新しい視角で興味と新鮮な印象の裡に示そうとするこのような動物寓話の發生乃至醸成には極めて適當していたと思考される。またイオニアやアテナイのみならず、外地即ち南伊のシユパリスその他リュビア、ブリュギア、キリキア等あるいはエジプト（極めて古い要素も含む）にも流行し、これらの本土に移入されたものもみなアイソポスの名の下に包括された。世界における動物寓話の一大集散地はインドでその『パンチャタントラ』は世界

に著聞し、引いてはかの『カリラとディムナ』物語としてアラビア系各地に流布したが、これとイソップ寓話との先後、また相互關係は極めて困難な問題とされる。大體においてその古い層ではむしろイソップの獨自性を認め得るといわれる。しかし猫や鰐の話、甲蟲の話、ハイエナや蟻の話など明かにエジプトやインドの要素も存しないわけではない。後代の追加も多く、中には哲人ディオゲネス、辯説家デマデスら明白な史上人物名も散見する。

これらの寓話が集成されたのは比較的遅く、記録には前三〇〇頃の學者パレロンのデメトリオスによるものを初めとするが、その後はしばしば作られたらしく紀元一世紀頃、三世紀頃にも推定され、現存する中世の集成も大約これらに基くと考えられる。他に傳存する別傳には紀元一世紀末のバブリオスによるギリシア文詩律體と、紀元頃のバエドルスによる詩律體とがあり、いずれも部分的に残つて體とがあり、これを綜合すれば所謂イソップ風寓話は四百五十篇程に上り、その内容も出來榮えも種々ながら、いづれも處生智を訓え

あるいは諷刺をこめ、庶民的色彩が強くその興えるモラルは概してさまで高くないが、なお『眞理の女神』『デマデスの話』の如きをも含み、寓話として高い規準に達したものが尠くない。ギリシア文としては後期に屬し平易でかつ古典の用法を下ることもしばしばである。

原典——C. Halm (Teubner, 1925).
E. Chambry (Paris, Budé, 1927.
佛對譯)。邦譯では岩波文庫に山本光雄（後者解説を除いた全譯）。その他新村出のイソップ研究がある。（吳茂一）

アーヴィング ワシントン Wash-
ington Irving (一七八三—一八五九)
アメリカの短篇小説家、歴史家。ニューヨーク一流の商人の家庭に生れ、初め法律をまなんで辯護士になつたが、やがて法律に興味を失つて文學に轉じ、兄たちが創刊した雑誌「サルマカントディ」にユーモラスな風俗時評の筆をとり、ついで三代にわたるオランダ總督の時代を面白おかしく物語つた『ニューヨーク史』（一八〇九）を出し

てみとめられた。一八一五年、一家の經營する輸入會社の代理人としてイギリスへ赴いたが、三年後、會社が破産したため、文筆で生計をたてねばならなくなつて創作に専心し、まもなく『スケッチブック』(一八一九—二〇)を發表した。これは、西洋浦島物語ともいふべき『リップ・ヴァン・ウインクル』をはじめ、『眠りの谷』その他、アメリカの傳説をとりあつめたもののほか、主としてイギリスの人情風俗をローマン的な筆でえがいた隨筆、合せて三十數篇からなり、おだやかなユーモアと上品な文體とを特徴としているが、出版早々非常な好評を博し、これによつて彼は、アメリカの文學者として誰よりも先にイギリス文學界へ迎え入れられる名譽にならることとなつた。その後、『ブレイスブリッジ・ホール』(一八二二)、『旅人物語』(一八二四)など、イギリスに題材をとつた短篇集を出す一方、大陸に遊び、一八二六年にはスペイン公使館員となつて、マドリッドに四年間滞在した。一八三二年、十七年ぶりに歸國し、それから晩年に至るまで文筆活動をつづけたが、す

でに文學界の情勢はかわり、アメリカ文學の開拓者としての役割は、歸國とともにほぼ終つたといつてよい。右にあげた以外の著書としては、ムーア人の傳説を集めたきわめてローマン的な短篇集『アルハンブラ物語』(一八三二)、『コロンプス傳』(一八二八)、五卷からなる學問的な勞作『ワシントン傳』(一八五五—九)などがある。

(西川正身)

アクサーコフ ヤルゲイ Sergei Timofeivich Aksakov (一七九一—一八五九) ロシヤの小説家。ウファ縣の大地主の家に生る。三〇年代にモスクワに出で、檢閲官となり、後視學官や學校長も勤め、教育界に活動した。官界を退いてからもモスクワに止まり文筆に携つた。初期の作品は、古典主義の模倣の色濃く、ボワロイやモリエールの翻譯、舊式なひからびた詩、戯曲、小論文の類で、既に當時ロシヤ文學界に捲き起つていたローマン主義の新思潮などには無縁であつた。四十才以後、狩獵等を主題とした幾篇かの作品『大吹雪』(一八四三)、『釣魚記』(一

八四七)、『オレンブルグ縣の銃獵者の日記』(一八五二)、『獵人の物語と思ひ出』(一八五五)等によつて寫實主義作家としてその文學的才能をあらわした。これらの諸作は、最初に狩獵、釣魚の案内書として書かれたもので、すでに十七世紀頃から出ていた類書(レンシン『獵人手引』、ヴェンチエストラフスキイ『エゲルスクの狩獵』、パトファインデル『エゲルスクの手記』など)の傳統を繼いだものにすぎなかつたが、動物界や自然の觀察、描寫という方面において寫實主義文學としての價値を示し、文學的作品として一般に認められた。しかし彼の文名を一躍高めたのは、その晩年にかかれた『家族の記録と思ひ出』(一八五六)、『孫バグロフの少年時代』(一八五八)の二大長篇である。これは、かれの父祖およびその孫たる作者の傳記的記録と見られるものであるが、きわめて平明、純朴なものであるが、きわめて平明、純朴な現實主義的表現においてロシヤ東邊の新し開拓された土地における地主生活の現實が描かれた。そこででは農奴所有者である地主の階級的な心理は微細をうがつて示されているが、作者は

この古い地主生活と農奴制度にたいして、なんらの疑念も挿まず、むしろある同感を以て表現しており、當時のロシアの多くの貴族インテリゲンチヤ作家の作品の中にきかれる「懺悔せる貴族地主」の聲も響いていない。しかしながら、現實に對するかれの透徹した眼は、この地主現實の暗黒面を見逃してはいない。この點農奴解放前夜におけるロシア社會の歴史の進歩的發展にたいして、かれの文學創作が何等の積極的な役割も演じなかつたと考えることは不當である。後になつてドブロリユーポフは、その農奴制にたいする理論的闘争において、アクサーコフのこれらの作品の中から、多くの武器を借用している。

アクサーコフの文學様式は、何ら文學的な街氣もなく純粹で清明で明朗で、その描く内容である靜かな平安なもののんびりとした地主生活の氣分と全く一致しており、そこには、かれの作品の内容と形式の渾然たる一致が生み出されている。その創作の初期において擬古派、古典流の修辭的な表現を信奉していたアクサーコフが、その晩年に

おいて、このような純朴な現實主義的表現に變移し、それによつてその文學的天分を發揮し得たということは、極めて注目すべき興味ある事實である。

(黒田辰男)

アダムズ (亨利 Henry Brooks

Adams (一八三八一—一九一八) アメ

リカの歴史家、文明批評家。家系に第二代及び第六代のアメリカ大統領を出した屈指の名家に生れ、ハーヴァードを出、ヨーロッパに遊學し、南北戦争中、父が駐英公使となるに及んでその秘書をつとめ、歸米後、母校ハーヴァードの歴史學助教となり、また「北米評論」誌の主筆などもしたが、一八八五年以後一大精神危機に際會し、一切世俗的經歷を絶ち、みずから「自己教育」と呼んで、絶えず世界を旅行した。完成された古典的教養の持主であり、十八世紀的秩序とモラルを信じる彼は、十九世紀來の産業主義文化に深い懷疑を抱き、漸次絶望と昏迷とに陥つた。アメリカのハムレットと呼ばれる所以である。そしてこの頃から激しく中世の伽藍的統一的文化を憧憬する

ようになり一九〇四年美しい中世研究『モンサーニーミシエルとシャルトル』を著し、ついで翌五年現代文明の紛雜と混亂を鋭く批判した精神的自傳『ヘンリー・アダムズの教育』を脱稿した。著述は、ほかに傑れた大部のアメリカ史、小説などもあるが、彼の名が記憶されるのは、上記の二著である。

彼によれば、中世文化こそ神學も哲學も政治も經濟も藝術も、すべてが一つなる神によつて美しい統一と秩序の保たれたものであり、それに對して、十九世紀以後の西歐近代文明は、完全に無政府的な多様、紛雜にほかならないと見た。そしてこの近代文明の最大の犠牲者を彼自身の中に發見し、苦悶はついに悲痛な懷疑哲學に到達するに至つた。『ヘンリー・アダムズの教育』は、こうした孤獨な魂の遍歴の稀有なる一つの人間記録である。彼は一九一八年、八十才の高齡をもつて歿したが、『アダムズの教育』は、生前私家版以外ついに公刊を見ず、死後十年はじめて公刊されるとともに、忽ちアメリカ文學古典の中に不動の位置を確保したばかりか、近年、現代文明の危機

が關心の焦點に上るに應じて、きわめて高い評價をかちえている。

(中野好夫)

アネルセン (アन्दルセン) Hans

Christian Andersen (一八〇五—七

五) デンマークの文學者、童話作家。

フューエン島のオーデンセに生れた。

父は貧しい靴職人であつたが、文學作

品とくにラ・フォンテーヌの『寓話』

や『千一夜物語』などを耽讀し、子供

にも讀んで聞かせた。少年アネルセ

ンは父親の影響をうけ幼時から物を

書くことを好み、迷信深い母親からは

生き生きとした空想力を受けついで。

十五才の時俳優たらんとして單身無一

物で首都コペンハーゲンに出たが、苦

心慘澹のいかにもなくその目的を達す

ことができなかった。しかし、恩人ヨ

ナス・コリンの扶助のもとに大學を卒

業することができた。大學生時代から

詩作に筆をそめ、一部の人々に認めら

れていたが、一八三三年のイタリア旅

行の印象をもとにした長篇小説『即興

詩人』(一八三五)はまずドイツにおい

て好評を博して、彼の文名をヨーロッパ

の中に響かせた出世作となつた。同じ

年に出た最初の童話集『子供のための
お話』を以て童話作家としてのスター
トをきつた。第三集以後は『子供のた
めのお話』をばうて單に『お話と物語集』
とした。爾來毎年クリスマスにはアネ
ルセンの童話集は各家庭のクリスマス
ツリーと共に待たれるようになった。
それは一八七〇年ごろまでつづいた。
童話總數は百三十餘篇におよぶ。彼は
生涯獨身で、放浪性あり、しばしば海
外旅行をした。とくにドイツとイタリ
アは彼の最も好んだ國である。『即興
詩人』と『さびしきヴァイオリンひき』
(一八三七)の二長篇小説は彼の多くの
戯曲、小説のうち今日なお世界的に愛
讀されているものである。一八四〇年
に出た月の物語『繪のない繪本』は童
話風の散文詩として、これまたひろく
讀まれている。一八四六年アネルセン
のドイツ語譯全集のために自傳『わが
生涯の物語』を書いた。後一八五五年
に増補して上下二巻となり、世界の自
叙傳文學に重要な位置を占めている。
一八七五年八月四日永眠。葬儀の日に
はデンマークの全國民が喪に服した。

アネルセンは文藝思潮的にはデンマ
ークのローマン主義の最後を飾る華で
ある。十八世紀末にヨーロッパ各國、
特にドイツを風靡したローマン主義は
十九世紀の初期にデンマークにも入つ
てきた。一八〇二年ドイツローマン
主義の中心地イェーナからノルウエー
人ヘンリック・ステッフアエンスがコペン
ハーゲンにきて、フイヒテ、シュレー
ゲルの思想を傳えた。折しも、一八〇
一年イギリス艦隊のコペンハーゲン攻
撃に敢然として起つたデンマーク人は
よく首都を守り抜いて、國家的意識が
高まり、祖國の歴史への關心も深まつ
て、従來の英佛兩國の影響下にあつた
合理主義とサロン文學とから脱却して
ステッフアエンスのローマン主義に共鳴
した。新思潮の指導者はエーレンジュ
レーグである。國民的感情の昂揚に
伴つて自然科学の勃興を見るにいた
り、世界的な物理學者エーレルステッド
を生んだ。この兩人はアネルセンを庇
護獎勵した恩人である。こうした關係
からアネルセン文學のロマンテイシズ
ムには現實の忠實な觀察にもとづくリ
アリズムが感得される。彼の本領たる

童話文學においてこのことは明瞭にうかがわれる。グリム童話が民族童話らしく民話的な素朴性を持つてゐるのに對して、藝術童話たるアネルセン童話はより情緒的、感傷的である。一方ラテン系童話の空想的、超自然的なるに對して、より現實的、人間的である。民話から取材したごく初期の童話、たとえば『火打箱』『大クラウスと小クラウス』等には荒けずりな素朴性が目立つてゐるが、次第に深い人生觀に根ざす宗教的な正義觀と獻身的な愛の色調が濃くなつてゆく。『親指姫』『人魚姫』『ひな菊』『みにくいあひるの子』『赤い靴』等、童話文學の最高峰にある多くの傑作童話はこうして生れた。しかし、晩年の作には作爲とアエロニーとに素朴さの失われたものも多少ある。

邦譯——大畑末吉『アンデルセン集』
(河出書房) (大畑末吉)

アーノルド マシュー Matthew Arnold (一八二二—一八八八) イギリスの詩人、批評家。ラグビーの校長として有名な、教育家トマス・アーノルド

博士の子、オックスフォードの大學を出て後、フランスの名女優ラジエルの妙技を見て憑かれたようにその跡を追うてパリに渡り、二月ばかり觀劇に現をぬかし、私淑する閨秀小説家ジュール・サンドを親しく訪れ、マルグリットとして知られるフランスの少女と戀に落ちるなど、多情多感の詩人らしい青年期を送つたが、後かかることを諦めて、視學官に就職し、結婚して、内地大陸の學校を見廻り、席の暖まるを知らぬような劇務をかこちながら、暇をぬすんで詩を作り、テニソン、ブラウニングと並び稱せられる地位を獲得した。

詩風の特徴は彼が自負してゐるやうに、思想の過渡期に生れて、「一つは死に一つはまだ生れる力なき」世界の間にさまよう近代の知識階級の悩みを代表してゐる點に存する。彼はテニソンのやうに民衆の心を心として歌うこともなく、またブラウニングのやうに知的好奇心から分析解剖の遊戲に耽ることもなく。彼の詩の奥には彼が嘗て言つたやうに「如何に生くべきか」を思つてゐる彼自身がある。その意味で

彼の詩は思想的であり、また古今東西に亘る彼の讀書の中から材料を得てゐる點で學者的でもある。次に彼の詩の一大特色として是非言わねばならぬことは、その憧憬の對象が、多岐にして慌しく、奔命に疲れるやうな人間の生活と對照せられる自然の單純と靜謐と清新とであることである。これは彼の最大力作である『ソーラブとラストム』の結末を取つて見ても分る。批評家E・K・チニムバースはアーノルドが「涼しい」という言葉が好きであり、月光に浸る風景を屢々歌つたことに注意を促してゐるが、それは如何にも肯綮にあつてゐる。テニソンやブラウニングが彩色畫家であるなら、アーノルドは墨繪の名手だと言えよう。

アーノルドの文學論は早く一八五三年の詩集の序に現れたが、一八五七年にはオックスフォード大學の詩學教授に選ばれ、以後益々多く批評の筆を執り、詩作の數は減じて、殆ど専ら文學社會の批評家として知られるに至つた。この方面に於ける彼の功績も亦頗る大きい。イギリス人は餘りに實際問題にかかずらつて無私の心を以て物事

をあるがままに見ようとする批評精神に缺けてゐる。批評が盛んで清新豊富な思想の流通がなければ立派な創作は生れない。前代のローマン主義時代の創作が未熟不完全なものに終つたのは批評が缺けていたためであるとして彼は英國國民の缺を補うに努めた。一方に於てギリシアの古典の價値を説き、他方に於てはドイツ、フランス、後にはロシアのトルストイにも及ぶ外國の文學を紹介して、國民の視野を廣めた。かように彼の文學批評が既に國民性の批評を含んでいたのであるが、彼はついで英國國民の實際主義が個人の自由のみを主張して無秩序を招來してゐることを慨し、これに對して完全を追求する教養の精神を重んずべきことを力説した『教養と無秩序』を著して社會批評家、文明批評家としての地位を確立した。『友情の花輪』もこの方面に於ける諷刺の文學として珍重すべきもの。最後にアーノルドは近代の科學精神の侵蝕の爲キリスト教の聖書そのものが全く權威を失つてしまおうとするのを惜み、その永遠に生きるべき部分を救う目的を以て、『文學と教理』『聖

パウロと新教』等を著した。この他にも『ホームー翻譯論』『ケルト文學研究』など優れた業績少からず、アメリカに於けるバビット、モアなどの「新人文主義」、T・S・エリオットなども彼の影響を蒙つてゐる。

全集——*The Standard Edition of the Works*, 15 vols, Macmillan.

(石田憲次)

アミエル アンリ・フレデリック Henri-Frederic Amiel (一八二一—八一) スイスの哲學者、ベルリン大學を卒業した後、ジュネーヴ大學の哲學教授として一生を過した。その間數冊の詩集と、若干の小論文を公けにしたが、今日においては、それらすべての著作は重要な文學的、哲學的生命を持つてはいない。アミエルを世界の文學史上における不朽の地位に置いてゐるものは、ただ彼の、一萬五千六百頁にわたる『日記』(一八四七—八一)のみであるが、彼自身は、この日記が公刊されるであらうとは夢想だにしない。それはただ、少年の頃孤兒となり、一生を獨身ですごした彼が、

孤獨な自己の慰め手として、あらゆる自己の苦惱や悲しみや寂寥感を吐露しつつ、三十數年にわたつて書き續けていたに過ぎないものである。

單調な線言や自己分析の多いその日記は、セナンクールやモーリス・ド・ゲランなどの夢想家の流れを汲むものであると同時に、それらの夢想家より更に廣い世界に視野が向けられており、自己と普遍的宇宙の生命との對決、無限への憧憬、絶對の渴望等の問題が深く追求されてゐる點において、あくまでも理知的である。彼の教養の基盤となるものは、シェリング、ヘーゲル、ショーペンハウエル等のドイツ哲學であり、それらの哲學より學びとつた普遍的イデーへの憧憬によつて、彼は事物の結果よりも原因に赴こうとし、偶然的な事象よりも本質的な事象へと赴こうとする。「永遠なるもの、絶對なるもの」のみ没頭しなければならぬ。絶對の中にしか休息はない。有限でないかなるものも眞實ではなく、興味を持たせるものでもなく、私に安定を與えるに價しないものである。あらゆる個別的なものは排他的であり、あ